AA研フォーラム

日時：2006年11月9日（木） 15:00-17:00

場所：AA研棟3階マルチメディア会議室（304室）

「トピック」が「主語」になる過程は文法化研究のなかでもとりあげられることがあるが、トピックという文法概念そのものがどこから発生してくるのかという議論はあまりなされない。これはしばしばトピックが既成の文法の枠内ではとらえにくい概念であるからであると思われる。しかし最近Paul Hopperの提唱するEmergent Grammarの枠組みの中では、このような文法以前の形・機能も積極的に文法理論の中に取り入れていこうという試みがなされている。
今回の発表では、タイ語話者が [X nii na] (nii は「これ」にあたることが、na は終助詞ー多くの場合niaと短縮される)という定型句をつかいトピックを徐々に築いていく過程を考察する。この [X nia] は日本語の主題提示の「は」に似た働きを示すこともあるが、「は」より機能が広範囲におよび「前提を持った疑問文」や「条件節」などと一緒にあらわれたり、Discourse Markerとして独立して用いられることもある。これらの現象を総合して考えると[X nia]の機能はこれから重要な情報がやってくるという予告をするということである。これは英語におけるpseudocleft文の機能にも通じるものがあり、前文法段階にあるタイ語の[X nia]が、これから既成の文法事実として確立していくかはさまざまな要素の影響によるものと思われる。

『タイ語におけるトピックの発展』

講演者： 岩崎 勝一 氏

（カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA)アジア言語文化科・教授）

主催：アジア・アフリカ言語文化研究所・言語動態研究ユニット

お問合せ
TEL 042-330-5603
Email kenkyu-zenkoku@tufs.ac.jp